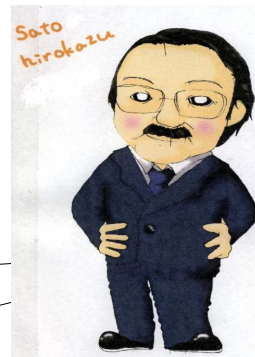


## 学級通信で語り合うミニ教研～こういう話ができる職場っていいなあ～

いきなり本音で恐縮ですが、ミニ教研の1月24日の週は仕事がハードで、「参加するのしんどいなあ。」とサボり心もありました。けど、「立葵」119号にあるように、とても濃厚なワクワクする中身の教研で、しんどさが一度に吹き飛び気持ちよく帰路につきました。こういう話し合いができる職場に来られて本当に良かったです。



\* 学生が描いてくれたカットです。まだヒゲがある時代のもの。

### <学級通信の名前>

1920年代から日本の学校で広まっていった学級通信・学級文集。その名前には発行する教師の想いがあらわれています。牛島先生の『六等星』第1号にはその名の由来を次のように書いています。心うつ投げかけの言葉ですね。

『六等星』は、肉眼で見える一番小さな星です。どんなに小さくても、”輝き届くと信じて”輝いている姿まで見付けたいという想いでいます。3年後、どんな姿で卒業していくのか…一緒に見守ってください。「どの学校を出たかではなく、何を学んだか!!」が大切です。何を学ぶか！一緒に考えていきましょう!!

冬部先生の『ながや』は、先生の少年時代の思い出と、「こういう学級であってほしい。」という想いが重なったネーミングなんですね。

渡邊実恵先生の『hirame通信』、ひらめの研究をしてきて、ヒラメのエンガワが大好きな先生らしいネーミング。ヒラメは悪い意味で使われる事が多いので変更も考えているようですが、敢えてこの名でいくのも良いのではと思いました。(ちなみに、カレイも似たような魚なのにどうしてヒラメだけが悪く言われるのか?疑問が浮かびました。)

時間がなくて竹口先生の『竹スポ』(以前見た時、そのプロフェッショナルな仕上がりに驚きました)や持丸先生の『TEAM4A』の話を直接聞けなかったのが残念でした。

### <担任と副担任で作る学級通信>

『103のココだけの話』は坂田先生のアット・ホームな呼びかけ風記事が温かいのですが、それに副担任の谷先生が”所狭し”とカットを入れまくって、より温かいものになっています。102も水曜日は長坂先生が通信を発行するようにしているとのこと。担任と副担任が協働して発行する通信は、私には初めてのものだったので新鮮でした。学級通信には教師の生徒を見る眼が映し出される、と言われますが、この協働作業が生徒をとらえる複眼的な眼差しにつながることを学びました。

(裏面に続きます)

## ＜先生たちの学び合い＞

ミニ教研のなかで牛島先生は大野先生の『おれ竜』に学び、冬部先生は成島先生の通信に学んだことが出されていきました。このような連鎖が起こる学校って素晴らしいと思います。ミニ教研の時に話しましたが、学級通信の発行を認めない校長や、通信の原版を目の前で破り捨てる校長さえいる学校もあります。父母を教育サービスの単なる「消費者」「受け手」とするのでなく、教師と共に（学校）教育を作り上げる主体者としてとらえ、子育ての合意を作っていくのに学級通信は大きな役割をはたすと思います。

## ＜『伝々夢詩』の話＞

研究所通信の名前には次のようなエピソードがあります。

10年ほど前に大学1年生14人の基礎ゼミを持っていた時のことだが、5月頃、1人の学生が「退学したい」と相談に来た。理由を聞いたうえで、私は、退学するならそれでもいいが、自分が退学する理由を1年生の仲間に話すことを勧めた。ゼミの時間を急遽クラス討論に変更したが、そこで彼女は涙声になりながら自分の思いをおよそ次のように語った。

「私は大学に入ったらいろいろなことを考えたいと思っていた。でも、ゼミ室で先輩やみんなが交わっている会話はとてもそんな雰囲気のものではなかった。ある日、思い切って自分が考えていることを出して意見を求めたらゼミ室がしらけ、”あんた、変わってるね”と言われた。こんな大学にいても意味がないから退学します。」

重苦しい沈黙が続いた後、ぽつりぽつりと語り始めた他の1年生が一様に口に出した言葉は「私も同じ思いだった。」ということである。周りの人間関係から「浮いてしまう」ことへの極度の恐れが、日常的にさしさわりのない、場をしらけさせないくおしゃべり>へとかれらをかりたてているのである。

（拙稿「いま、なぜ書くことをだいじにするか」『作文と教育』誌1996年1月号より）

この話し合いをきっかけにして、誰もが好きな時に、好きなことを書くクラス通信を出そうということになり、1人の学生が提案した「伝々夢詩」が名称になりました。そこにはゼミの感想だけでなく、日頃考えていることや、悩んでいること、下宿生のための簡単料理レシピなど様々な内容が書かれていきました。基礎ゼミは2年生までで、3年生からは専門の研究室に分かれますが、「伝々夢詩」は在学中ずっと続き、卒業後は郵送されてきたり、教師になった学生たちは「伝々夢詩」という名の学級通信を自分のクラスで出し続けています。そして、私も講義通信やこの研究所通信の名前に使っています。

私が大学院生時代に毎月通っていた岐阜県恵那郡付知町立東小学校の4年生では『のらいぬ』という通信が出されていきました。正月には子どもが親に宛てた「綴方年賀状」と親の返信が掲載されたり、親の書いた文章も時々載っていました。この子どもたちが青春を迎え、悩み多き年頃になったとき、ある子が「悩むと『のらいぬ』のファイルを読み直して自分のことを考える」と語っていました。生徒たちの成長が①固有名詞で、②クラスメイトとの関わりで述べられ、③それがクラスや保護者と共有され、④成長の記録として残されてゆく、そんなところに学級通信の意味があるのではないかと思いました。今後も学級通信で語り合う企画をぜひ続けていただきたいと思います。